

地域文化に密着した言語学習の可能性

— 沖縄大学CALL対応のマルチ言語学習システム開発プロジェクト —

ジャネット・ヒギンズ*・伊藤丈志**・渡邊ゆきこ***

In Search of Regional Culture-Driven Language Learning:
A Multi-Lingual CALL System Development Project for Okinawa University

Janet Higgins, Takeshi Ito and Yukiko Watanabe****

本論文は現在沖縄大学で進行中の、沖縄と日本(本土)の文化に着目した多言語(英語、中国語、日本語)映像辞書作成プロジェクトについて記述したものである。

本プロジェクトは沖縄大学の学生が、言語的、及び文化的に異なる背景を持つ人たちと自分達の生活と環境について話ができるようになるためには、それに要する語彙を習得することが必要であるという認識からスタートした。

当プロジェクトで作成中の辞書はテーマ毎に構成されている。このような形態を取るのには、言語習得において利用される記憶システム、及びネットワーク状に構成される心的辞書についての知見に基づいている。映像(静止写真、及び短い動画)を利用するという点については、語彙学習において、概念イメージを構築することが語彙習得には有効であるということを実証した研究に基づいている。また、学習様式に関する研究では、学習者にはそれぞれが好みの学習様式があるということが明らかになっているが、学習者が語彙に触れる際に複数の感覚器官を利用するよう設計している本プロジェクトは、学習者にさまざまな学習様式を提供することを可能にしている。

また、本論文では、語彙項目の翻訳、定義、説明、文法的特質の扱いなど、辞書項目を定義する際に生じるさまざまな問題も議論している。

CALL辞書プロジェクトは現在、沖縄大学CALL教室を利用しており、語彙項目とその例文は音声と文字の両方で多言語表示が可能であり、簡単なテストも可能である。

キーワード：沖縄、英語、中国語、多言語学習、映像辞書

This paper describes a CALL software project being currently developed at Okinawa University to create a multi-lingual (English, Japanese, Chinese) visual dictionary with items focussing on the cultures of Okinawa and mainland Japan.

The project arose out of the perceived needs of Okinawa University students to have access to the lexical resources required to be able to talk about their lives and environment to those with different linguistic and cultural backgrounds.

The CALL project dictionary items are organised around themes. This form of organisation capitalises on what researchers know about the nature of memory and the network-like organisation of the mental lexicon. The value of using visuals (photos and short videos) is attested by research which demonstrates the positive value of imagery in vocabulary learning. Research into learning styles has found that learners have preferred learning styles. By adopting a multi-sensory approach to vocabulary presentation, the project aims to cater for students with different learning styles.

The paper also discusses some of the problems of defining the target terms, in terms of translation, definition and description, and syntactic issues.

* 沖縄大学人文学部, 902-8521沖縄県那覇市宇国場555, jmdh@okinawa-u.ac.jp

** 沖縄大学人文学部, 902-8521沖縄県那覇市宇国場555, takesi@okinawa-u.ac.jp

*** 沖縄大学人文学部, 902-8521沖縄県那覇市宇国場555, watanabe@okinawa-u.ac.jp

****執筆者名の順番は、アルファベット順である。

The CALL dictionary project currently uses the Okinawa University CALL lab. This allows target items and short texts to be presented in multiple languages, in spoken and written form. A simple testing system is also available.

Key words : Okinawa, English, Chinese, visual dictionary

1. はじめに

本プロジェクトは、静止画像(写真)や短い動画を利用した言語学習ソフト開発を目的としたものである。コンピュータを利用した語学学習システムであるため、「CALLプロジェクト」と呼ばれている。⁽¹⁾

中心的なプロジェクト課題は、沖縄、日本、そして東アジア諸国の事物に焦点を当てた映像辞書(visual dictionary)を制作することであり、この辞書に語学学習上有効となり得る様々なタスク(リスニング、ライティングなど)を付加し、レファレンス機能以外の語学機能も担ったものとするを目標としている。使用言語は、日本語、英語、中国語であるが、必要に応じて沖縄方言や他言語の使用可能性も追求していく。

プロジェクトは広く東アジア全体を射程にしているが、プロジェクト前半は南西諸島(特に沖縄本島)と日本本土を中心とした事象、事物を中心に、後半は残りの東アジア地域に徐々にその射程範囲を広げていく予定である。

本稿は以下のように構成される。まず、2において、上記プロジェクト発足に至った背景を報告する。次に、本プロジェクトになぜ映像辞書が必要で、それをなぜCALLラボで実現可能とする必要があるのかという点について3で述べる。4では、現在制作進行中の辞書がどのような構成で、どのように語学学習として利用されるものとなっているのかについて紹介する。

2. プロジェクト立ち上げの背景

沖縄大学では、2003年度より英語の授業で、語彙力増強対策として、受講生全員に*The Oxford Picture Dictionary* (Shapiro and Adelson-Goldstein 1998)の購入を義務付け、英語力向上に一定の効果を上げてきた。しかし、語彙が“beets”や“mantel”など欧米では一般的であるが、沖縄ではほとんど見かけることのない

事物、事例が取り上げられる一方で、沖縄では一般的な「トーフヨー」や「ヘチマ」についての記述は見られないなど、沖縄の学生にとっては、取り上げられる項目に偏りがあり、実用性に欠くきらいがあった。そこで、英語教員の中から、沖縄や東アジアに焦点をあてた、(欧米で制作されたものを補完できるような)沖縄の学生に実用性の高い学習教材を求める声があがっていた。さらに、これをCALLソフト上で実現できれば、リスニングやライティングにも顕著な効果が上げられるのではないかとこの意見も同時にだされていた。

一方、中国語でも、2003年度のCALLシステム導入にともない、中国語の学習ソフト「Dig」を導入し、授業で活用しているが、日本本土志向が強く、沖縄の文化的事象を中国語で表現することはできない状態にある。そこで、中国語の教員の中からも、沖縄の文化を中国語で表現できるソフトの実現が求められてきた。

2004年度、一部の英語教員と中国語教員が、使用中の語学教材について、また現行のCALLシステムの発展性について情報・意見交換する場があり、言語の違いを超えて共通する問題を抱えていること、及び新しい(CALLシステムを利用した)教材の必要性を感じていることが判明し、今回のプロジェクトを結成するに至った。

3. 映像辞書(visual dictionary)とCALLシステムの必要性

本プロジェクトはCALLシステムを利用した映像辞書制作を目的とするが、本節では、なぜ本プロジェクトは映像を利用した辞書制作を意図したのか(3.2)、そしてそれがなぜ地域密着型である必要あるのか(3.2)、さらにその辞書はなぜCALLシステム上で運用可能なものである必要があるのか(3.3)について述べていく。

3. 1. なぜ辞書に映像が必要なのか？

写真やイラストを利用した辞書は、事物、事象自体にまだ十分な知識と経験をもたない子ども向けの必須の物として存在するが、成人向けの辞典であっても、語義とその指示対象との関係が、学習者が所属する文化、社会のものと異なる場合、不可欠となってくる。例えば、日本の「カボチャ」は和英辞典等では“pumpkin”と掲載されることが多く、日本人英語学習者は日本でよく見られる「カボチャ」を連想しがちであるが、“pumpkin”はオレンジ色をした日本のカボチャよりもかなり巨大なものである。最近の辞書にはこうした補足説明がついていることが多くなってきているが、こうした説明も写真等の画像が与えられれば、学習者にはその違いは多くの説明がなくとも容易に理解されることになる。また、通常説明すらされない違いについても、画像を用いるとその違いに気づくこともある。その一例が「りんご」である。鈴木(1990)が指摘しているように、通常日本人がリンゴを思い浮かべる際、それは赤いものを想像する。しかし、西欧社会では、必ずしもリンゴは赤いとは限らず、緑色のものを思い浮かべる人も多い。このように、映像を用いることで、学習者に期待していた以上の情報をもたらす可能性も含んでいるのである。「百聞は一見にしかず」と言われるが、技術の進歩により、語学教育も映像の力を十分に利用できる段階に来ており、これを利用することで臨場感あふれる語学教育へ進むことが可能となる。

3. 2. なぜ地域密着型である必要があるのか。

従来の写真または絵図中心の学習教材資料は、書籍物では『Color ANCHOR英語大事典』（学研）や『KEEP写真で見る英語百科』（研究社）、*The Oxford Picture Dictionary*、デジタル素材ではMicrosoft社のENCARTAなどが出版されているが、これらの教材はmantelやbeetsなど比較的寒い地域を念頭に置いた語彙に偏っており、欧米社会中心の編集となっている。イギリス、カナダ、アメリカなど、英語を第一言語で使

われている地域が比較的寒い地域に集中している事がこの原因であると思われる。しかし、国際的な共通語として機能している英語や中国語などの言語学習のためには沖縄や東アジアの地域をも念頭に置いた教材が必要である。この問題は、英語においては「国際英語」がいかなるものであるべきであるのかという問題意識で社会言語学の分野で検討されている重要な一課題である。国際英語論推進の議論は、いかに文法や発音を簡略するべきかという言語内的な問題に集中しがちであるが、それぞれの地域独特の事物、事象をどのように説明していくのか（つまりどのように英語を地域発信の手段として使用するのか）という視点からの議論があまりなされていないのが現状のように思われる。本研究プロジェクトは、そうした社会言語学的課題に対しても、沖縄という言語環境から一つの提案が提供できるものであると考えられる。⁽²⁾

一方、中国語の画像辞書としては、台湾で『牛津・社登日漢圖解詞典』（中央図書出版社）が出版されているが、これは英語の原典を翻訳しただけのものであり、英語の画像辞書同様、使用する地域の文化には配慮されていない。その点、中国の上海詞書出版から出版されている『漢詞図解語典』は、同書店が独自に編纂したものであり、中国特有の事物や文化、例えば餃子や年糕（餅の一種）などの食品や胡弓などの伝統楽器、太極拳の型の名称にも触れるなど、中国の文化に深く配慮している点が大きな特徴である。他の画像辞書が西欧の文化を理解することに力点が置かれる「受信」を中心としたものであるのに対し、同書は中国の事物や文化を多言語で説明するという「発信」にも力を入れたものであるとも言え、評価できる。

また一方で、沖縄という地域で語学教育を行うという実際上の観点からも、地域密着型語学教材の必要性を確認することができる。沖縄は日本本土（特に東京や大阪などの大都市）とは異なり、外国語使用の多くは観光に結びついている。しかしながら、多くの外国語教材は沖縄との関連性が薄く、実用的なものは多くない。沖縄を舞台にした語学教材はこれまでも

『Feel in Okinawaハイサイ沖縄』（桐原書店）や沖縄大学講師陣が執筆した『沖縄の素顔(Profile of Okinawa)』（テクノ）のような沖縄社会・文化に関する解説本が中心で、英語で書かれているとはいえ、語学力向上という観点からは使いやすいものであるとは言い難い。このような状況下で、沖縄を舞台にした外国語学習教材開発のためのプロジェクトはそれ自体十分価値あるものであると思われる。一方、外国語教育の現場からすると、沖縄という多くの外国人と遭遇する機会が多く、観光地としても日本を代表する土地では、地域性を活かした言語教育が存立し得るのではないかと考えられる。本研究開発は、これまで外国語教育ではほとんど考慮されてこなかった「地域性を活かした外国語教育」の可能性を探求するものである。⁽³⁾

さらに、語学教育を受けている学生からも、地域密着型語学教材の要望が寄せられている。毎年、沖縄大学からは数名の学生が海外の提携大学に留学しているが、多くの学生が現地で沖縄のことをどのように現地語で説明したらよいか困難を感じている。この困難は、学生たちの外国語力不足だけではなく、自分たちが育った環境についての知識とそれをどのように外部の人たちに説明していくかという点に無関心であったことが原因であることが多い。このことから、こうした海外に出て行く学生のためにも、また逆に沖縄にやってくる外国人学生のためにも、沖縄という地域の事物、事象を表す語彙とそれを使った簡単な典型文例を映像と共にアクセスできる辞書が必要であり、これは地域の文化的資源としておおいに重要な存在になる物と考えている。

3. 3. なぜCALLシステムを必要とするのか？

CALL (Computer-Assisted Language Learning) システムとは、コンピューターを使用した言語学習システムのことである。従来のLL (Language Laboratory) の機能をコンピューター・システムによって実現したものもあるが、LLと大きく異なるのは、LLが音声中心であるのに対し、CALLシステムはパソコンのモニターと

いう画像提示機能を持ったことで、「聞く」、「話す」という機能に加え、「読む」、「書く」という機能の提示や訓練も可能になった点である。

今回制作する多言語映像辞書は、画像と文字、そして音声を1つの画面の中に実現するマルチメディアなものであり、まさにコンピューター上でしか実現しえないものと言える。

出版された「画像辞書」(picture dictionary)に加えて音声という情報を提供できることが、コンピューター上に制作された辞書の大きな特徴であることは言うまでもないが、それ以外にも、例えば動詞を説明する際には、静止画ではなく、短い動画を使用することで、より正確な理解が可能となると同時に、学習者により強い印象を与えることで、学習効果も高まると見ている。

また、CALLシステムは、単なるコンピューター教室とは異なり、教員のメインコンソールあるいは学習者間で音声や文字による通信が可能である。この機能を使えば、映像辞書を授業に活用することも可能となる。また教材をサーバーに蓄積することも可能であり、教員が必要に応じてダウンロードし、学習者に配信することができる。将来的には学習者が必要に応じてダウンロードし、自らの学習度に沿って学習を進められるようなシステムの構築を計画している。また、いずれの場合も学習記録を残す機能は必要であり、これによりソフトは授業だけではなく、自習にも有効活用が可能となる。

学習者が当該言語により多く触れ、練習を繰り返すことが習得への重要なポイントとなる語学学習にとって、このCALLシステムは格好の学習環境を提供するものであり、学習ソフトである映像辞書をより十分に活用できる環境であるともいえる。

4. 作成中の辞書の概要

本節では、現在進行中の辞書がどのような内容のものであるのかをみていく。まず、辞書の特色であるテーマ別配列がどのような理論的意義を持っているのかという点を確認し(4.1)、実際にどのようにテーマを選

択したのか(4.2)、取り上げる語彙(キーワード)をどのように選定して全体的な構成を形作ったのか(4.3)を順に見ていくことにする。

4. 1. テーマ別配列の優位性

作成中の辞書は、その他の映像辞書と同じように、テーマ、話題別に語彙がまとめられている。映像辞書は通常、ある場面(例えば、空港)とその場面に登場する語彙、そして必要に応じて図が使われることで構成されている。場面を利用することは、関連する多くの語彙項目を登場させることができるため、とても効率的である。また、一つのテーマに関する複数の語彙を写真によって掲載することで、各語彙の関連性が一目でわかるようになる。こうした辞書の構成は、人間の記憶システムのあり方と密接に関係しており、その点でも強力な教材となり得る。

学習は一種の記憶作業であり、学習方法の検討はこの記憶の問題と切り離せないものである。以下では、テーマ別配列されている当該辞書がどのように記憶の問題と関連しているのかを考えていきたい。

語彙学習においては、長期記憶との関連性が重要である。これは、比較的長い期間にわたって語彙を記憶する領域およびその能力のことであるが、これに情報がどのように貯蔵されて、また引き出されるのかをまず考えてみたい。

記憶の働きについては、多くの研究者が様々な認知モデルを使用しているが、共通した認識は、語彙情報は、相互に関連づけられた形で貯蔵されており、これが短時間で引き出し(呼び出し)を可能とするというものである。従来の紙の辞書や電子辞書はアルファベット順に配列されているが、複数の実験結果から人間の頭の中では語彙はこのようには記憶されておらず、語彙はカテゴリーや連想によって構成されていることがすでに明らかとなっている。例えば、語彙の構成を調査する目的で行われたFreedman and Lotsu(1971, Gairns and Redman(1986)に引用)では、語彙の想起時間を計測することで興味深い実験結果を導いている。彼

らは被験者に、ある語彙が属するカテゴリー名、そして文字を示すという提示順序と、文字を最初に示してから、カテゴリー名を示すという提示順序を比較して、前者の提示順序の方が被験者は早く当該語彙を想起することができるという結果を報告している。Gairns and Redman(1986)は「多くの研究者たちは(視点がそれぞれ違うものの)語彙項目は連想に基づいたネットワーク上に配列されていることには意見が一致しているように思われる」と述べている(Gairns and Redman 1986: 88)。また、意味体系、綴り字体系、音韻体系、文法体系の間にも関連性があることも明らかになっている。例えば、Brown and McNeil(1966, Gairns and Redman(1986)に引用)の研究では、頻繁に使われることのない語を、定義から答えることができない被験者でも、同じ意味領域の語を思い出すことがあったり、答えとなる語の音節数や最初の文字は答えられることがあったりしたという事実を報告している。

記憶研究における重要な領域には忘却という領域もある。ここでは、使われない語彙は徐々に記憶から消されていくという語彙衰退の問題の他に「手がかり依存の忘却」(cue-dependent forgetting)と呼ばれるものが存在することが指摘されている。これは、忘却が記憶貯蔵の問題ではなく記憶想起の問題であることを示唆している。記憶の想起は手がかりがあると改善されることが明らかになってきているが、この手がかりには、上位語や下位語が含まれる(Gairns and Redman 1986: 89)。話題(topic)や下位話題(subtopic)もまた同様の働きをする。

話題(topicまたはtheme)は、カテゴリーの一種であり、連想ネットワークの一つの形態である。これは記憶想起の手がかりとしても働くことができるものであることから、これを辞書の構成型式に利用することができれば、辞書を利用した言語学習は、心的辞書への自然な語彙登録と近似なものとなり得ることになる。これは学生が語彙の記憶と想起を強力に援助するものとして機能するものと思われる。

4. 2. テーマの選定

今回作成するのは、沖縄在住の学習者が生活の中で体験する可能性の高い場面を想定し、その場所に関する映像を見ながら英語、中国語、日本語（ウチナーグチ）の単語を文字と音声で学習できるビジュアル・ディクショナリーという学習ソフトである。初の試みと

なった今回はまず、県外、あるいは海外への移手段として、沖縄で最もポピュラーな飛行機による移動を想定し、「那覇空港」を題材に選んだ。「空港」は、外来者の受け入れと自らの門出の象徴的存在である点にも注目している。

具体的な使用の現状から、「出発」と「到着」の2バ

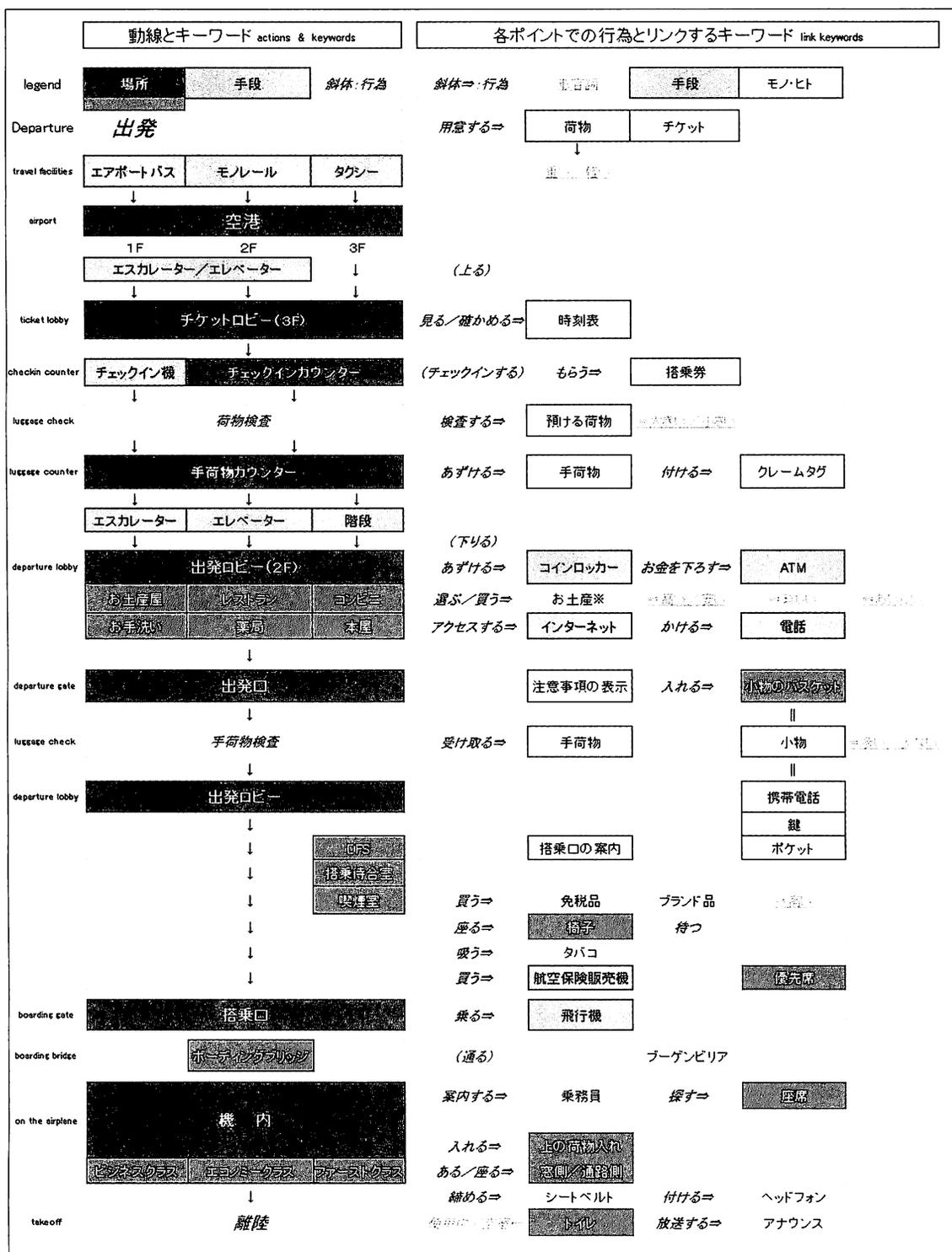


図1：キーワード・リスト

ージョンを作成している。

4. 3. キーワードの選定と全体の構成

ここでは「出発」を例に、「那覇空港」を題材にした具体的な動線の設定とキーワードの選定内容を説明していきたい。

まず動線の概要は、バス、モノレール、タクシーのいずれかで空港へ着き、3階のチケットロビーでチェックインし、2階のみやげ物屋で買い物をして、出発ロビーで荷物検査を受けて、出発ロビーへ進み、搭乗口を抜けて、飛行機に乗るまでの過程である。図1は、抽出した単語の一覧であるが、この図の左半分がその動線モデルを具体的に示したものである。

単語は、まず日本語を基準に、場面(チェックイン・カウンター、搭乗口など)とそこで行う行為(チェックインする、買う、乗る等)を選び出し、更に行為に関連する名詞を選び出していった。選定する語彙は、搭乗までのできるだけ一般的で自然な行為や会話の中で使われるものとし、例えば那覇空港ではチェックイン・カウンターのあるフロアを「チケットフロア」と称しているが、一般的ではなく、通常の会話には使用される確率が低いものとみなし、動線図には記しているが、最終的なワードリストには入れていない。

単語は、大きく分けて、場所を示す名詞、その場所で行う行為を表す動詞、そして多くはその動詞の目的語という形で意味的に関連する名詞の3種となる。また、辞書の項目とはしないが、行為や事物の状態を形容し、一般に多用される形容詞(荷物:重い、多い。お土産:

高い等)も練習問題などの会話の中で提示していく。

図2は、チェックイン・カウンターでの行為と関連する事物を図式化したものである。左の四角が場所を表す名詞であり、右向きの矢印が行為を表す動詞、右側の楕円が関連する名詞を示している。これら一つ一つの場所、行為、事物が辞書の見出し語となり、それぞれ1ページで示される。また、上述のように、名詞は写真、動詞は動画によって示す予定である。

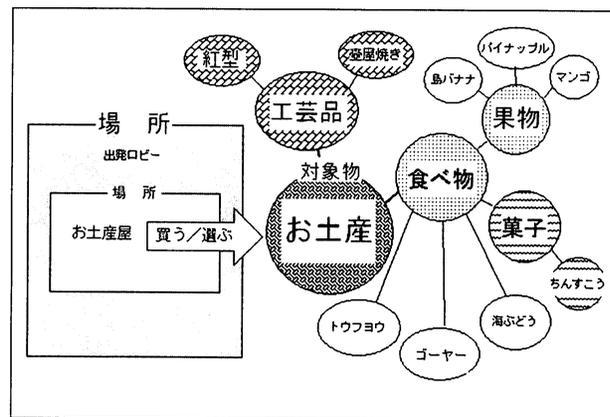


図3：お土産屋の場面

また図3は、2階のお土産屋での行為とそれに関連する名詞を図で示したものである。空港の中でも土産物は、沖縄の特産物や沖縄独特の文化に関連するものが多いため、日本語だけでなく、ウチナーグチの表記も併記する。また、写真の選定では、商品としての外観と中身、食品であれば飲食する際の習慣になど配慮した。

4. 4. キーワードの翻訳とそこに現れた文化的相違の処理方法

辞書項目の記述をする際には、多くの事項を考慮に入れる必要が出てくる。ここでは「トーフヨー」を例にとって、どのような点において考慮が必要になるのかをその一端を示していきたい。

a) 語彙の記載形式

見出しとなる語彙の記載形式については、基本となる日本語単語に対応する英単語にはいくらか工夫をしている。文法用語にそれほど通じていない学習者にも対応できるように、文法用語は極力避けるようにした。

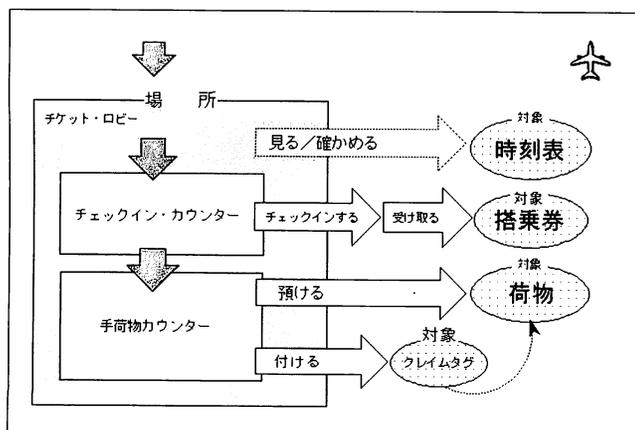


図2：チェックイン・カウンターの場面

動詞については、“to +不定詞”の形で記載し、同一形態の名詞との差異化を図った。名詞の場合、英語には可算名詞か、不可算名詞かによって文の組み立てが異なってくるので、可算名詞には不定冠詞“a”（または“an”）を語の前に付与し、不可算名詞の前には何も付けないことにした。それぞれの語の例文には、その語の文法特性を反映するよう定冠詞や複数形を用いた例文を用いるよう配慮した。

また、日本語文法と英文法、中国語文法との統語法、語法の相違も注意を要するところである。例えば、「結婚する」という語は、日本語では「AがBと結婚する」というように「が」と「と」を必要とする。中国語では「A跟B結婚」と言い、日本語の「が」に相当するものはないものの、「と」に相当する「跟」を使用するため、翻訳は比較的容易である。しかし、英語では、「と」を“with”と解釈することが多いので、“A marries with B”としがちであるが、これは正しくない。“A marries B”とするのが正しい英語である。こうした項構造と格表示の言語間における相違を避けるために、日本語の動詞については（義務的に）付随する助詞を表示に含めることにした。

b) 綴り

沖縄に関する用語については、音声表示の正確さを求めると、初学者には馴染みのない音声記号や特殊な記号を用いる必要があるため、近似音を表すカタカナを用いて表記することにする。英語については、英語話者に読みやすいように修正ヘボン式のローマ字形式を用いることにする。長音については母音を重ねる（“oo式”）を用いることにする。これにより、「豆腐蓉」は“toofu-yoo”と表されることになり、外国語学習者には拍数理解の助けとなると考えた。⁽⁴⁾

c) 英語、中国語への翻訳

沖縄に関する語をどのように英語に翻訳するのが最良なのかを考慮するのが大変重要となってくるのは言うまでもないが、何が「最良」なのかと言う点につい

ては、もっとも透明である（わかりやすい）ということ念頭におくことにした。例えば、「豆腐蓉」を現実にはどのように翻訳されているのかを調べてみると、“pickled tofu”（酢漬けされた豆腐）や“fermented tofu”（発酵した豆腐）、creamy cheese（クリーム状のチーズ）など数種類の英語訳を見つけることができる。

本プロジェクトメンバーのイギリス人の言語感覚では、“pickled tofu”の表現からは、豆腐蓉の乾いた特徴（食感）が伝わらないと思われる。イギリス人にとっては、“pickled”された食品というと野菜や卵が酢に浮いている状態にあるか、カットした野菜や卵が濃厚な酢味のソースであてであるような印象を持つ。一方、“fermented tofu”にはこのような水っぽいはなく、より適切である印象を受ける。時には、“creamy cheese”と説明されることもあるが、これは乳製品ではないので、製品そのものからかなりかけ離れており、訳語としては不適切であると言わざるを得ない。しかし、こうした訳語の決定は、極めてそれぞれの文化に依存してなされるものであり、将来的にはさらに正確な記述方法を考える必要がある。

また、対応する語が存在していても、使用法が異なるという場合も存在する。例えば、日本語話者にとって、荷物をコインロッカーに入れることは「コインロッカーに荷物を預ける」と表現することは極めて自然であるが、英語や中国語でこういう場合、「預ける」（に相当する語）を用いることはできない。コインロッカーは単なる置く場所として認識され、英語では“put one's baggage in the coin lockers”、中国語では「把行李寄放在投币式自动保险箱里／把行李寄放在寄物箱裏」と表現するのが普通である。⁽⁵⁾

さらに、対応する語が存在していても、指示対象が微妙に異なるという場合もあり、注意が必要である。例えば、「城」という概念を指示する事物は日本本島や欧州各国では城郭を中心とした建物であることが普通であるが、中国、台湾においては、城壁に囲まれた地域を指すことが多く、沖縄では日本本島と中国のどちらの概念も有するなど簡単に各国の事物を並べること

は難しい。

中国語においては、さらに大きな異なる問題がある。現在使用されている中国語の標準語には、中国で使用されている「普通話」と台湾で使用されている「国語」の2つがある。中国では「簡体字」という中国が独自に簡略化した漢字で表記し、台湾では伝統的な「繁体字」を使用している。つまり、文字でも中国語には2つの大きな系統があるのである。

また、訳語も中国と台湾では異なる。「トーフヨー」に例を取ると、「豆腐乳」や「腐乳」は中国、台湾ともに使用されているが、「醬豆腐」、つまり「豆腐の漬物」という名称は北京では一般的であるものの、台湾では使用されない。他にも、中国では「搭乗券」を「登机牌」と称するのに対し、台湾では「登机證」とするなど、異なる部分は少なくない。

今回制作する辞書で、中国の表記法と訳語を使用することは言うまでもない。しかし、沖縄は台湾と地理的に近いこともあり、古くから交流が盛んで、現在でも海外からの観光客のほとんどが台湾人観光客である。この辞書では、学習者が実際に使用する状況にも配慮し、中国と台湾双方の記述法と訳語を採用していく。

また、沖縄独自のものをいかに中国語に翻訳していくかという問題もある。野菜や果物など中国や台湾に同じものが存在する場合、問題は比較的少ない。例えば、「ゴーヤー」は、中台ともに「苦瓜」で通じる。一般に中国人は白いものを連想するが、画像を付すことでイメージの食い違いは解決可能となる。しかし、沖縄独自の事物の翻訳となると、問題はいささか複雑化する。例えば、「紅型」は漢字で表記されてはいるが、そのままでは中国人にこれが織物の名称であることは理解できない。このような場合は、「染」や「布」など意味を補う語を加訳する必要がある。

沖縄と中国の歴史的な交流の中で渡来した事物に関しては、歴史的な名称への配慮も必要となる。例えば、一般にひらがなで表記される「ちんすこう」は、『沖縄大百科事典』によると、中国から伝わったものであり、「金楚糕」と記すとある。このような場合は、歴史的な

表記法を重視したい。⁽⁶⁾

d) 翻訳から使用へ（定義と記述）

本辞書は文化的情報を提供することを意図しているため、「豆腐蓉」を“fermented tofu”と翻訳しただけでは、この食品の本質を伝えるという目的からすると満足のいくものではない。そこで、写真を利用することで「豆腐蓉」がどのような外見をしているのか、通常どのように食卓に出されるものであるのか（小皿の上に乗られ、爪楊枝等のスティックが添えられてある等）、通常どのような形態で販売されているのか、などがわかるように工夫している。他にも、どのような味がするのか、何といつしょに通常食されるのか（泡盛の肴として食されることが多い）、どんな機会に食することが多いのか（自宅で頻回に食するものではない）などの情報も重要であるが、これらは例文によって表す事が可能であると考えている。

e) 語彙と統語法

辞書では、ガイドブックやパンフレット等の情報誌や会話などの自然談話において、語彙がどのように使用されているのかを表すことを心がけている。その際に使用する英文では、英文を構成する際に考慮されるべき統語法の問題（名詞における単/複、可算/不可算の区別、主語-動詞の一致など）を避けて通ることができない。特に、沖縄や日本独特の単語を形態論的、統語論的に英語の単語と同じように扱って良いのかという問題が生じる。

「豆腐蓉」のような語は冠詞使用や動詞の一致については、さほど問題にならない。「豆腐蓉」はチーズのような物質であるため不可算名詞として扱うことができる。これは、英語の“cheese”が物質名詞で不可算名詞扱いであるのと同じである。従って、この単語は日本語と同じように、冠詞も付かず複数形の“-s”も付けずに使用することができる。しかし、「ゴーヤー」のような語はこうした統語法の問題に直面することになる。以下のような言い回しは、英語母語話者には奇異に感

じる人もいるようである。

(a) I love goyas.

(b) I bought 3 goyas today.

しかしながら、かつては借用語であった“banana”や“boomerang”が通常の英単語と同じような扱いを受けようになったことを考えると、上記のように英語として扱うことに大きな問題はないものと考えている。

5. オーサリングソフトによる教材ソフトの作成

5. 1. オーサリングソフトの機能

今回のソフト制作では、本学のCALLシステム Panasonic社L³Stage付属のマルチメディア授業支援システム「WE-AS870/WE-AS871」を使用し、WBT型教材を作成した。

WBT型教材とは、静止画、動画、音声、テキストを組み合わせた教材をウェブ上に作成する教材で、サーバーに蓄積して学生に配信することができ、学生は本のページをめくるようにウェブページを自分のスピードで次々と見ていくことができる。今回使用したオーサリング・ソフトは、1ユニットにつき50項目、つまり50語に関する辞書を作成することができる。

図4が、WBT教材1ページ分の基本的なデザインである。3つある領域の内、1番上の囲み部分は、静止画もしくは動画を貼り付けられる画像領域で、1ページに最大で2つこの領域を設けることができる。真ん中がテキスト領域で、この領域も2つまで設定が可能。一番下が問題設定領域で、最大5択の選択問題を設定することができ、最大5つ増やすことができる。また、テキスト領域には、1ページで最大2つまで音声ファイルをリンクさせることができる。これを「ハイパーリンク」と称している。音声をハイパーリンクさせたテキストファイルの場合は、青く表示され、学生側はこの部分をクリックすることで、音声を聞くことができる。動画のページでは、ページ下に表示されるプレイボタンなどを使って、ビデオを操作する時と同じように、見ることができる。

画像、テキスト、問題設定のいずれの領域も、マウ

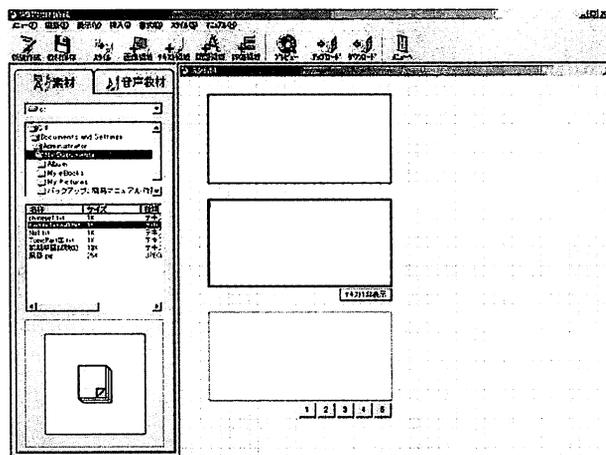


図4：オーサリング・ソフトの基本画面

スを使って自由にその位置や大きさを変えることができる。ドラッグすることによって自由に変えることができ、それぞれの領域を学生側に表示するか否かが自由に設定できるため、同じ画像や音声を使って、いくつかの異なるパターンの問題や解説のページデザインにすることも可能である。

5. 2. 教材のページデザイン

5.2.1 ピクチャー・ディクショナリーとしての基本デザイン

今回使用したソフトの大きな制約は、テキスト領域に中国語や中国語の発音記号であるピンインを打ち込むことができないことだった。そこで図5に示した「トーフヨー」のページでは、英語の「fermented tofu」、中国語で「豆腐乳/酱豆腐」、日本語として「トーフヨー」と打ち込んだテキストを一旦画像として取り込み、2つ設定できる画像領域の1つに貼り付けるという形で処理した。画像は、商品としての外観と実物がテーブルに供された場面の2つを用意し、事前に2つの画像を1枚の画像に合成して張り付けるという手順を取った。

音声は、テキスト領域にしか貼り付けられないため、テキスト領域は英語と中国語の音声を聞くための「ボタン」として位置づけ、それぞれ「English」、「中文」と当該言語で表記して、音声をリンクさせた。学習者はそれぞれの文字をクリックすると、音声が聞けるシ

システムである。

「トーフヨー」は名詞であるため、動画はないが、動詞の場合には画像領域に動画を貼り付け、ページ下部にある操作ボタンで見ることができる。

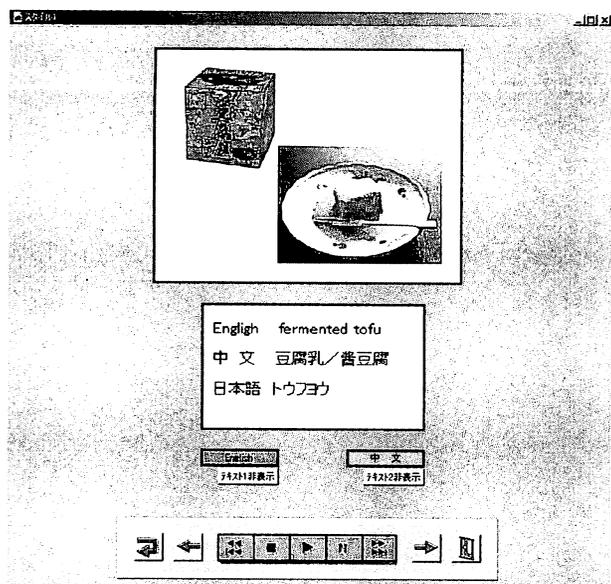


図5：映像辞書の学生端末画面

また、今回提示したのは、基本的な辞書のページデザインだが、将来的には更に高いレベルのバージョンも用意し、言語ごとに空港で取り交わされる典型的な会話やその音声のバージョンなども制作する予定である。

謝辞

本研究は、沖縄大学地域研究所共同研究班・多言語学習CALLソフト（研究テーマ：CALL対応のマルチ言語学習システム開発、代表者：ジャネット・ヒギンズ）による助成研究の一部である。

注

- (1) CALLとはComputer Assisted Language Learningの略語であり、コンピュータを利用した言語学習、またはそれを行う施設のことを指す。
- (2) アジアに着目しているという点では、本名信行(2002)『アジア英語辞典』（三省堂）などは先駆けの研究成果であるが、映像資料はなく、東アジア地域を射程にもしていない。
- (3) すでに、沖縄大学では、本稿執筆者の一人である Janet Higgins担当の「英語セミナーA」（前期）、「英語セミナーE」（後期）という科目が“Tour Guide in English” というテーマ

で開講されている。この科目では英語で地元の観光地をガイドするには どのような説明と、英語表現が望ましいかを受講者と共に考え、ガイド活動を実践するという試みがなされている。

- (4) 修正ヘボン式の正式な長音の表記法では、アクセントシラコンプレックス(例えば“o”)やマクロン(例えば“ö”)を用いるが、日本語初学者（特に英語母語話者）には見慣れない可能性が高く、また現在設置しているCALLシステムでは利用できないという実際的な理由により、今回は使用を見送った。
- (5) コインロッカーを辞書では「投币式自动保险箱」と表記している。正式な名称だが、実際に会話の中でこのような用語が使われているかは非常に疑問である。また、台湾では比較的普及しているが、中国では都市部の大型デパートなどには設置されているものの、それほど普及していないというのも事実である。本ソフトでは、実際に会話で使用されている用語を使うことが妥当であると思われるが、単に「保险箱」とすると、貸し金庫も指すため、訳語の選択にはより慎重な配慮が要求される。
- (6) これに関連して、「シーサー」の中国語訳は、一般に「獅子」でも構わないが、沖縄のシーサーは通常一匹で、対になってはいない。これは福建省から渡来したものであることによると思われ、現在でも福建省では同様のものを「风獅爺」あるいは「镇风獅」と称している。この場合、一般的な「獅子」を取るか、歴史的な事実に基づいた名称を取るのか、沖縄の文化的な位置づけに対する配慮等を含め、更なる検討が必要だと思われる。

引用文献

- 新崎盛暉（編），2000，『沖縄の素顔—和英両文100 Q&A(Profiles of Okinawa: 100 Questions and Answers)』東京：テクノマーケティングセンター
- Clark, J.M. & Pavio, A., 1991, Dual coding theory and education. *Educational Psychology Review* 3 (3), 149-210.
- Gairns, R. & Redman, S., 1986, *Working with Words. A guide to teaching and learning vocabulary*. Cambridge: CUP.
- 堀内克明ほか，1984，『Color ANCHOR英語大事典』東京：学習研究社
- 本名信行（編），2002，『アジア英語辞典』東京：三省堂
- Jones, L., 2004, Testing L2 vocabulary recognition and recall using pictorial and written test items. *Language Learning and Technology*, 8 (3), 122-143.
- Levin, J.R., 1983, Pictorial strategies for school learning: Practical illustrations. In M. Pressley and J. Levin (eds.) *Cognitive Strategy Research*. New York: Springer Verlag.
- 沖縄時事出版（編），1999，『Feel in Okinawa ハイサイ沖縄』東京：桐原書店

- Pavio, A., 1983, Strategies in language learning. In M. Pressley and J. Levin (eds.) *Cognitive Strategy Research*. New York: Springer Verlag.
- 櫻庭信之ほか, 1992, 『KEEP写真で見る英語百科』東京: 研究社
- Shapiro, N. and J. Adelson-Goldstein, 1998, *The Oxford Picture Dictionary (Monolingual edition)*. New York: Oxford University Press.
- 上海辞书出版社, 1995, 《汉词图解语典》上海: 上海辞书出版社
- Schmitt, N., 1997, Vocabulary learning strategies. In N. Schmitt, & M. McCarthy, (eds.) *Vocabulary Description, Acquisition and Pedagogy*. 199-227. Cambridge: CUP.
- Soo, K., 1999, Motivation, and the CALL Classroom. In J. Egbert & E. Hanson-Smith (eds.) *CALL Environments: Research, Practice and Critical Issues* Virginia: TESOL.
- Sokmen, A.J., 1997, Current trends in teaching second language vocabulary. In N. Schmitt, & M. McCarthy, (eds.) *Vocabulary Description, Acquisition and Pedagogy*. 237-257. Cambridge: CUP.
- 鈴木孝夫, 1990, 『日本語と外国語』東京: 岩波新書
- 中央圖書出版社, 1994, 《牛津・杜登日漢圖解詞典》台北: 中央圖書出版社